

景観遺産登録資料

北但大震災からの復興を今に伝える「豊岡震災復興遺産」

(1) 登録番号、名称及び所在地

登録番号	名称	所在地
3-9	こうじゅ舎 (旧中源商店)	豊岡市中央町 18-8
3-10	衣川クリーニング	豊岡市中央町 18-9
3-11	橋本結納店	豊岡市元町 3-18
3-12	服部本社	豊岡市小田井町 13-25
3-13	つるや	豊岡市千代田町 8-23
登録理由	地域の歴史と深いつながりがあること、地域特有の構法や意匠形態であることに加え、同じ特徴を持つ他の建造物等が失われつつあるなど希少価値があるため。	

(2) 登録日 (予定)

令和 7 年 5 月 23 日

1 タイトル	北但大震災からの復興を今に伝える「豊岡震災復興遺産」	登録番号
2 種別	建造物群	3-9~3-13
3 概要	<div data-bbox="497 338 954 701"> </div> <div data-bbox="967 353 1497 701"> </div> <div data-bbox="488 734 948 1128"> </div> <div data-bbox="967 707 1292 1128"> </div> <p data-bbox="497 1256 1501 1576"> <ul style="list-style-type: none"> ・北但大震災からの復興過程で整備された都市空間に建設された鉄筋コンクリート造（以下、RC造）で不燃化された公共建築と、民間の耐火・防火建築。 ・日本近代の災害復興都市空間遺産（震災だけでなく大火、水害、暴風、戦災など多様な災害によって被災し都市計画が行われ復興が進められた地域が全国に存在する）として約100年前に形成され現在まで継承されている全国的にも希少性が高い景観。 </p>	



5 登録要件

□地域との関係性

近代以前から日本海側の主要な都市として栄えた豊岡は、早くから近代的なインフラ整備に取り組んでいた。豊岡では 1925 年 (大正 14) の北但大震災以前から耕地整理事業によって都市計画的意図を持った都市基盤の整備がおこなわれ、新市街のベースをつくっていた。その事業途中で北但大震災が発災し、復興事業は以前から進められてきた都市整備を推進する連続的な都市計画として実施された。特に耕地整理では手がつけられなかった既成市街地が大火で燃えたことによって、道路整備が進んだ。この時、拡幅とともに直線上に整備し直されたのが、現在の豊岡のメインストリートとなっている大開通り (駅と近世以前からの市街地をつなぐ道) と元町通り (近世からの南北の主要道) である。

こうした都市基盤の整備とともに北但大震災後に取り組まれたのが、公共建築の集約と建物の不燃化による「シビックセンター」の整備と、建設費に補助金を出し建設された大開通り沿いの民間建物の不燃化である。この民間建物の不燃化は、大開通り沿いでは建物の共同化とともに進み、昭和初期にはRC造の近代的な町並みが生まれた。

以上のように豊岡において北但大震災後に現れた町並みは、行政による力強い都市基盤と公共建築の整備と、補助を得た民間による建物の不燃共同化によって生まれることとなった。こうした町並みは 2000 年代以降、「復興建築 (群)」として地域のヘリテージマネージャーを中心に捉えなおされ、まちづくりのなかで地域の遺産として評価されてきた。

□独自性

関東大震災後の復興共同建築を参照して建設されたと考えられる RC 造の民間共同建築の一部は、町屋の面路部のみを不燃共同化したもので、豊岡独自の災害復興期の建造物である。また、建物全体を不燃共同化した RC 造長屋を含め、西洋建築的な装飾を持った外観が、今回の景

観遺産のストーリーを構成する要素の特徴である（個々の建物の意匠的な特徴に関しては、今後、専門的な調査の実施が望まれる。）。街場の大通り沿いの長屋がこうした装飾を持って不燃共同化していることは、全国的に見て豊岡の独自性と言える。

□希少性

20 世紀前半の日本での巨大災害の復興期に建設された建築・都市空間遺産は、多くが消失しているなか、豊岡の中心部の「復興建築（群）」は町並みとして残されている。北但大震災（1925 年）の 2 年前に発災した関東大震災後の街場の復興遺産の多くが姿を消したことと比較しても希少性が高く、日本の近代史を考える上でも重要な遺産である。

6 ストーリー

○ **豊岡城下町**

豊岡城下町のはじまりは、中世に遡る。戦国末期、羽柴秀吉の配下である宮部善祥坊継潤が 1580 年（天正 8）、豊岡城に配備されて以降整備が本格化した。17 世紀末までに豊岡城下町は、陣屋を中心とした内郭と円山川沿いに延びる町屋とで構成される南北 2.1km、東西 0.8km の範囲に広がり、背後には広大な農地を控えている。

○ **都市の近代化：震災前夜**

17 世紀末の豊岡城下町の姿は、以降約 200 年間は大きな変化を見せなかったが、20 世紀になり急激に姿を変えていく。1909 年（明治 42）、中心部よりも西側に豊岡駅が設置され、元来の産業である柳行李の隆盛もあり豊岡の人口が増大した。

こうした時期に町長となった由利三左衛門は、助役の伊地智三郎右衛門と共に、好景気を背景に「大豊岡ノ建設」を目指して、円山川治水・丹但鉄道（現京都丹後鉄道）建設、耕地整理法を活用した市街地と道路の整備、上水道の設置・公共施設の改築・杞柳製品の製造販売研究の奨励・教育の振興などを掲げた。この事業が北但大震災後の復興計画のベースとなる。

1921 年（大正 10）5 月に豊岡町耕地整理組合を設立し、同年 12 月に工事着手。1932 年（昭和 7）まで 14 年間をかけて事業を実施した。『豊岡町地区整理誌』によると、豊岡駅から東向きに延びる大開通りは 8 間（14.5m）として両側に歩道を設け、豊岡駅から東北方向に斜線道路（寿通り）を延ばし、通りの中央に小公園（寿公園）を置いた。寿通りはパリのシャンゼリゼを真似て造ったとされている。

○ **震災後の大豊岡構想**

1925 年（大正 12）5 月 23 日午前 11 時 9 分 57 秒、円山川右岸下流部を震源とするマグニチュード 6.8、震度 6（当時最大）の烈震が襲った。ちょうど昼食の準備中だったため火を使っている家が多く、各所で火災が発生し、町北部の小田井地区の大部分を残して、町中心部に延焼した。この登録資料では「震災復興期」とは、1925 年（大正 14）5 月 23 日の発災から復興計画の全ての事業が完了し「震災 10

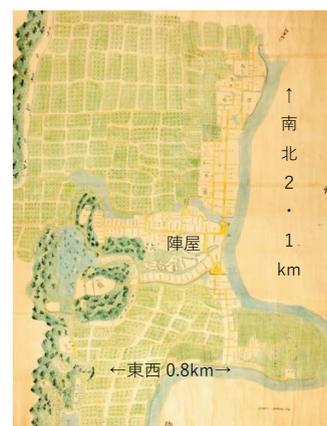


図 6-1：元禄十五年豊岡城下絵図

周年記念出版「豊岡復興史」が発刊された1936年（昭和11）4月までの期間とする。

震災後の整理・復興・産業の振興を計るため、豊岡町は臨時復興部を置き、豊岡町復興区画整理組合定款を定めた。復興事業は、国からの無利息借入金や義援金などを主要財源として行われた。大豊岡構想を助役であった伊地智町長が受け継ぎ、従前の区画整理事業を拡大させていった（実際には耕地整理事業の継続であり、大火による被災地では区画整理は行われず道路拡幅と整備に留まった）。

東西南北の格子状道路のうち、主要な道路の幅員を拡幅した。まず、県道の幅員を2.3間拡げて6.5間（11.8m）にして両側を歩道とし、寿公園に直交し小田井移転候補地となる道路を4.2間から5.2間（9.5m）に、シビックセンター西側の道路も大開通りから寿公園に至る間を5.2間にひろげ片側に歩道を付けた。また、大開通りに並行する南側の道も同様に拡幅している。

兵庫県の指導に従い、それまで各所に散在していた行政施設などを大開通りのほぼ中央の北側の区画に集中させて、シビックセンター（中央官庁街）とした。豊岡町役場を取り囲むように、警察署・郵便局・税務署・消防事務所及び警鐘台が一角を成して並んだ。消防事務所及び警鐘台を除いて全てRC造で、町役場の塔屋からの眺めは「眺望絶佳、遠近ノ山川歴々弁スベシ」と絶賛された。

○ 復興建築の建設

豊岡町では北但大震災による倒壊や焼失で1,861戸に被害が及んだ。先述の通り、復興にあたって豊岡町は大豊岡構想を震災復興でより積極的に展開して進め、大開通り及び元町通りの県道沿いを防火帯とすべく道路拡幅をしたうえで面路部への耐火建築の建設を補助制度をもって推奨した。こうして建設されたRC造の耐火建築が現在「復興建築（群）」と呼ばれている。

実際には震災後に本建築として被災地に建設された建物を端的に示せば、図6-5のようになる。

まず震災復興期に本建築として建設された建物は、公共建築と民間建築に大別される。民間の建物は施主の経済的条件、考え方によって多様な現れ方をしたが、震災復興期の豊岡の公共建築はそのほとんどが耐火建築（RC造）として再建された。

続いて民間建築は、耐火建築建設のための補助を受けて建設された民間耐火建築と、補助を受けていない木造建築があり、木造建築はさらに塗屋造となっている木造防火建築と、真壁で立面が造られている裸木造に分類できる。民間耐火建築は、震災復興期に兵庫県の建設費補助制度「防火家屋建築費補助内規」を用い民間によって建築された48軒のRC造建築である。木造防火建築は、震災復興期に建設された木造建築物のうち、塗家造りや軒裏への防火処

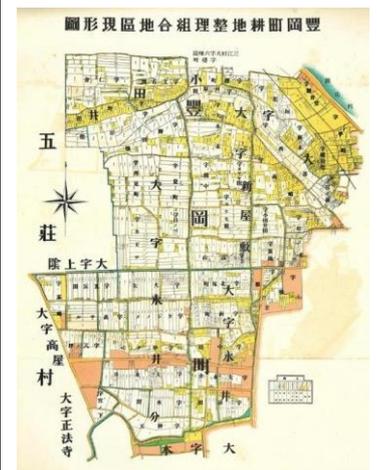


図6-2：耕地整理前の現況図



図6-3：耕地整理後の確定図

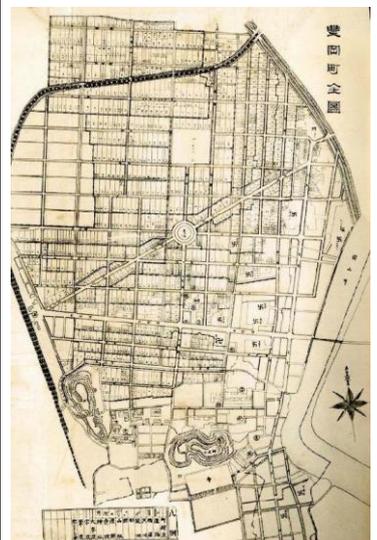


図6-4：1932年頃の豊岡町全図



図6-5：豊岡町における復興建築の分類

理、袖壁の設置など防火、防災を意識した意匠が見られるものである。

また、新規流入者が多かった大開通りでは、建物の共同化（RC造長屋として建設）が進んだ。一方、行李・鞆産業と円山川の船運により19世紀までの豊岡の商業の中心地として栄えた元町通りでは、商業者が多かったため、単体の民間耐火建築が建設された。

○ 地域での「復興建築（群）」の位置付けとまちづくり

今回の景観遺産登録で対象とする北但大震災後に建設された建物が豊岡で注目されるようになったのは、次のような経緯がある。

①2000年代半ば、北但大震災後に建設された近代建築を「復興建築（群）」と位置づけ、まちづくりの中で保存・継承をめざす活動がヘリテージマネージャーらによって活性化した。2006年（平成18）2月11日にはシンポジウム「復興建築群とまちづくり」が開催された。

②2006年（平成18）に旧兵庫縣農工銀行豊岡支店（渡邊節設計）が国の登録文化財となった。

③2007年（平成19）春から夏、ヘリテージマネージャーの中尾康彦による産経新聞での連載「但馬の近代化遺産を訪ねて」で北但大震災後に豊岡と城崎で建設された近代建築について紹介された。

④豊岡市教育委員会が2014年（平成26）に大学や高専と連携し「豊岡震災復興建築群」の調査を行った。内容は次の⑤の全国町並みゼミで報告され、調査の成果を活かしたマップが豊岡駅通商店街振興組合によってつくられた。

⑤2015年（平成27）6月12～14日に開催された全国町並みゼミ豊岡大会の分科会3つで、北但大震災と豊岡と城崎のまち並みに関する議論が行われた。

⑥2016年（平成28）には旧豊岡町役場庁舎と佐藤家及び西村家住宅が国の登録文化財となった。

⑦全国町並みゼミ豊岡大会をきっかけに2015年（平成27）に組織された任意団体「豊岡まち塾」は、2023年（令和5）現在までに豊岡近代化遺産の地図、豊岡と城崎の古地図と現在の地図を重ね合わせた地図、豊岡のまち並みと「復興建築」を紹介する映像を作成してきた。

こうした活動の画期は、旧豊岡町役場庁舎の取り壊しが議論された2000年代半ばと、震災復興で建設された建物の調査と国の登録文化財化が進んだ2010年代半ばで、地元の専門家によってまちづくりの中で位置づけられてきた。前者は兵庫ヘリテージマネージャーの故・中尾康彦を中心にした動き、後者は元豊岡市歴史博物館副館長（豊岡市教育委員会）の松井敬代を中心にした動きである。言葉としては、中尾康彦によって北但大震災後に建設された近代建築（RC造と木造含め）が「復興建築（群）」と呼ばれるよ

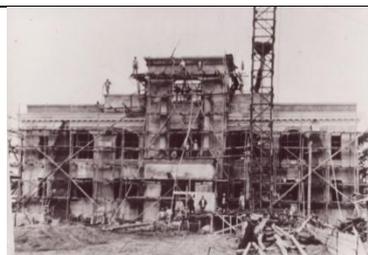


図6-6：建設中の旧豊岡町役場庁舎

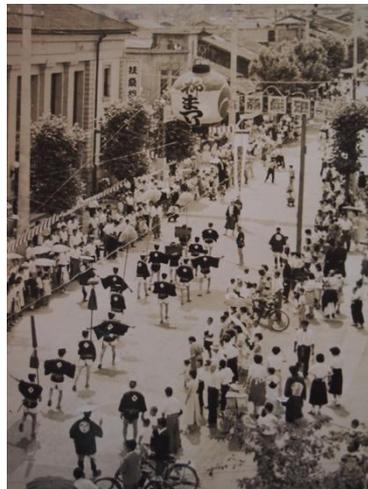


図6-7：大開通りでのお祭りとお兵衛農工銀行豊岡支店（左上）



図6-8：2004年に「豊岡の近代化遺産中心市街地マップ」としてつくられた地図。北但大震災

うになり、その後地域ではRC造の建物（群）を指して「復興建築（群）」と呼ぶように「一般化」していった。

用語の定義

復興建築（群）：この登録資料では、豊岡における「復興建築（群）」を北但大震災後に建設されたRC造の建物とその群とする。これは地域で現在使われている「復興建築（群）」の用法でもある。

復興遺産：震災復興期につくられ、現存している物的な遺産を「復興遺産」とする。「復興建築（群）」は重要な「復興遺産」であるが、震災復興期に形成が進んだ道路、橋梁、護岸などのインフラから木造建築なども広く「復興遺産」と捉える。

後の復興建築を対象としたもの。



図 6-9：2007 年に開催された「たじま近代化遺産入門講座（全3回）」のパムフレット。第2回は「北但大震災からの復興 豊岡城崎・復興に関わる施設群」。

7 ストーリーを構成する要素とその位置づけ



図 7-1: 位置図

(1) こうじゅ舎（旧中源商店）（豊岡市中央町 18-8）



図 7-2：正面（西立面）外観

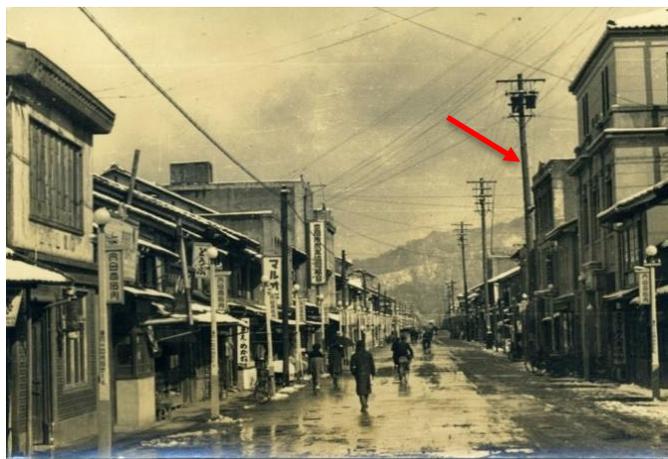


図 7-3:昭和 20 年代の宵田通。南から北を見る。
右側に並ぶ建物のうち矢印で示す 3 階建の建物が当該物件。

構造 鉄筋コンクリート造 3 階建て鋼板葺き
建築年 昭和初期
規模 間口約 8.2m、奥行約 10.7m

沿革

宵田通に西面して建つ RC 造の建築物。宵田通周辺は地震後の火災によって大半が焼失した範囲である（図 7-4）。商工年鑑等の記録では、1927 年（昭和 2）に海産物卸商・宮垣源四郎（屋号 中源）の営業が確認できることから、震災から数年のうちに建築されたと推定される。その後、(株)中源商店として昭和 40 年代まで食品・酒類販売店、1967 年（昭和 42）頃からミシン販売店、1983 年（昭和 58）から子供物品販売店として営業していた。

1984 年（昭和 59）に附属の木造部分が解体され、鉄骨造で増築されている（図 7-5）。現所有者である (株) こうじゅ舎は、2007 年（平成 19）に購入し、RC 造部分の室内階段を鉄骨造部分に移設することにより、RC 造部分を事務所として利用しつつ、増築部分と一体的に利用している。

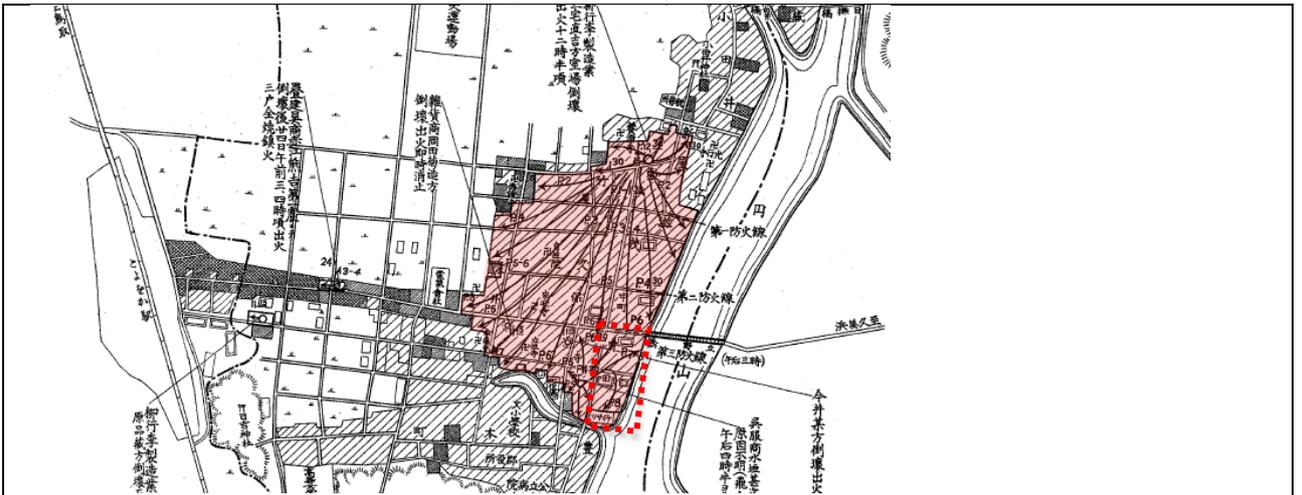
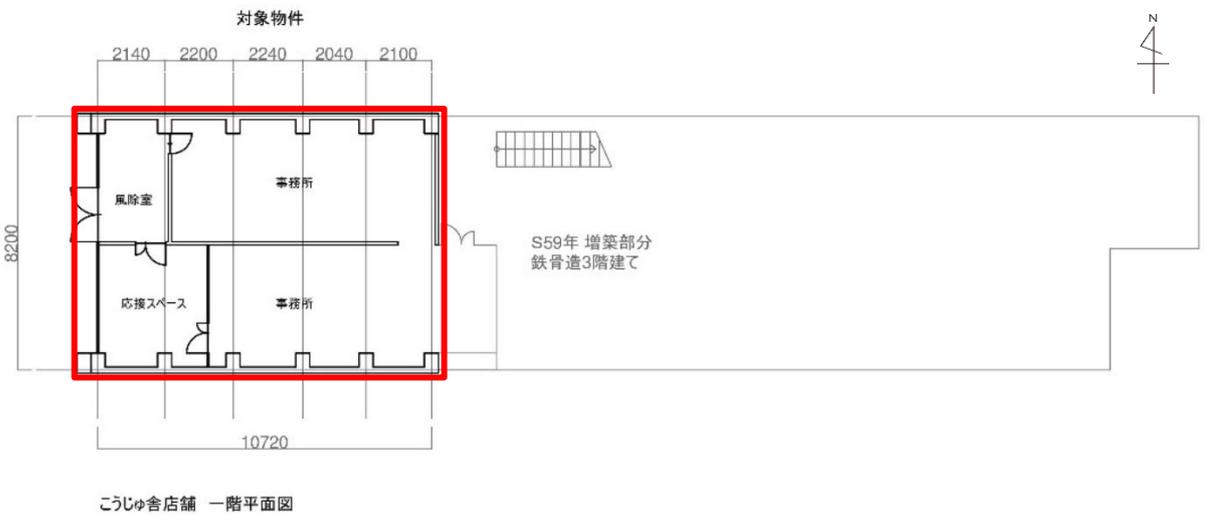


図 7-4 赤い網掛けが火災での焼失範囲。
赤い点線で囲われているのが宵田地域



こうじゅ舎店舗 一階平面図
図 7-5: 1階平面図 (所有者提供図面より作成)

外観

1階の正面は店舗として開口部を広く設けているのに対し、2、3階はそれぞれ5つの縦長窓が並ぶ。窓は3つの柱間に分けられ、ピラスター風の角柱で装飾されている。角柱の上端部分には垂直の溝が並び、抽象化されたモダンな柱頭として水平の軒（コーニス）を支える（図 7-6）。建物上端のパラペット中央部には山型の装飾が配置され、その両端には巻物風のモチーフが施されている（図 7-7）。

1階は改修されているため往時の様子を伺うことはできないが、2、3階はサッシの変更以外は竣工当時の形態をよく残している。所有者によると、改修前は1階正面の上部にコンクリート造の庇や持ち送りが付けられていたが、10年ほど前のアーケード改修時に撤去されたものと思われる。屋上は建築当初の陸屋根の上に鋼板葺き勾配屋根を被せているが、パラペットより低いため外観に影響はない。



図 7-6 : 立面上部の装飾

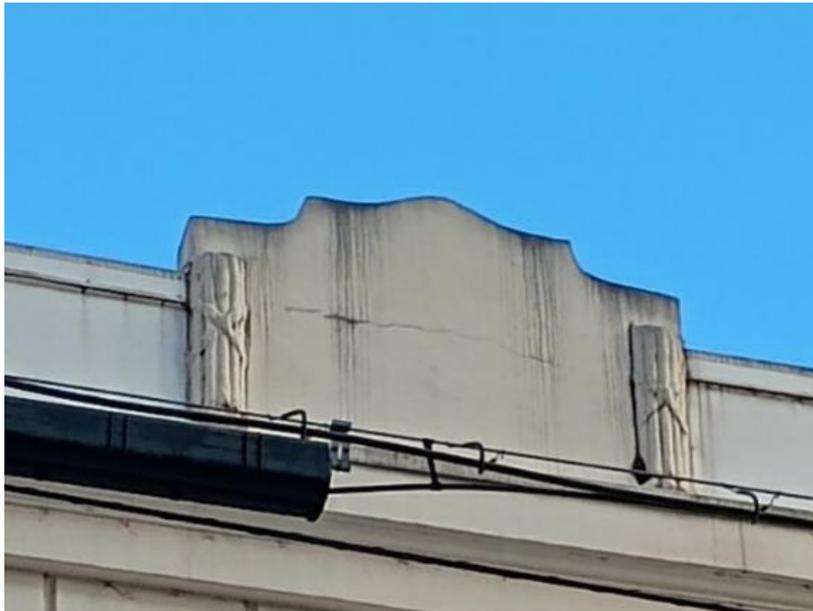


図 7-7 : 看板と巻物風モチーフ

(2) 衣川クリーニング店（豊岡市中央町 18-9）



図 7-8 : 正面（西立面）外観



図 7-9 : 1962 年（昭和 37）の宵田通りの写真（豊岡市提供）。北からを南見る。左側に並ぶ建物のうち矢印で示す 2 階建の建物が当該物件。

構造 鉄筋コンクリート造一部木造 3 階建て瓦葺

建築年 昭和初期

規模 間口約 4.9m、奥行約 7.4m

沿革

（株）キヌガワは宵田通に西面して隣り合う 2 棟の建物で営業している。北側の RC 造 3 階建て瓦葺（以下「北側 RC 造物件」という。）と南側の木造 2 階建て瓦葺（以下「南側木造物件」という。）の建築物である（図 7-10）。衣川クリーニングとして 1913 年（大正 2）に創業。震災当時は大開通りにて営業していたが、震災を契機に宵田に移転したものとみられ、1931 年（昭和 6）には南側木造物件において居住していたことが官報で確認できる。

また、この頃に隣接する北側 RC 造物件を購入し、賃貸物件として運用。1978 年（昭和 55）頃まで「岡本理容所」が営業しており、現在でも店内には当時のタイル壁が残る。

北側 RC 造物件は当初 2 階建ての陸屋根であったが、1970 年（昭和 45）頃に木造で 3 階部分を増築。2011 年（平成 23）、2 棟間の壁を一部撤去し、現在は「カバンコンシェルジュ キヌガワ」として、鞆のクリーニングや修理の専門店として活用されている。



図 7-10：正面（西立面）

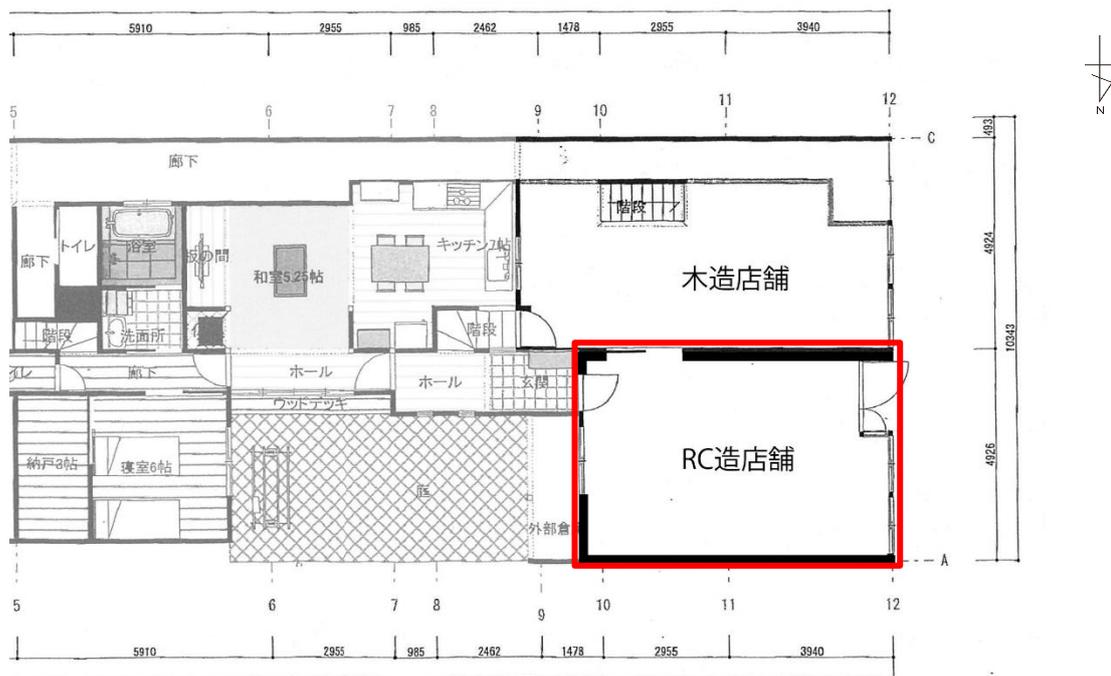


図 7-10：一階平面図（所有者提供図面より作成）

外観

【北側RC造物件】

RC造建築の1階部分は理容所時代の面影を残しており、特徴的な3連の開き窓が開放的な印象を与える。2階には縦長の開口部が3つ並び、それぞれに両開き窓とその上部にスタンドグラスがあしらわれている。正面（西立面）は壁面部が少しセットバックされることで、角柱や建物上端の石張り風の水平帯（図 7-13）が際立っている。3階の増築部分は既存パラペットの上部に突出しないよう切妻屋根が架けられて

おり、道からのアイレベルではその存在感は小さく、正面の姿は竣工当時の姿から大きく変化していないと考えられる。

細やかにデザインされた装飾（図 7-13）が魅力的な建物であり、商店街のアーケードで立面意匠の多くが隠されていることが悔やまれる（図 7-14）。

南側木造物件と共通して使われている緑色系の塗装は 2011 年（平成 23）の改修時のもの。



図 7-12：建物後部の現況写真。奥の北側 RC 造物件には 3 階の増築部分が、手前の南側木造物件では山型のパラペットが確認できる。



図 7-13：建物上部の石張り風の装飾やステンドグラス。



図 7-14：アーケードで一部が隠れた装飾。

(3) 橋本結納店（豊岡市元町3-18）



図 7-21：正面（東立面）外観



図 7-22：昭和初期の姿

構造 鉄筋コンクリート造 2階建て瓦葺

建築年 昭和初期

規模 間口約9m、奥行約11m

沿革

元町通に東面するRC造2階建ての2軒長屋。震災前より同地で営業していた橋本硝子店と河本鉄工が、震災で焼失したため共同で長屋を建てた。

当時の当主・橋本勇治郎氏は1925年（大正14）の震災時は区長を務めており、地域の防災性向上のためにRC造で再建したという。

「防火家屋建築費補助内規」の制度を利用していると推測され、他の例と同様に1927～28年頃の建築と考えられる。1930年頃より昭和恐慌の影響から硝子店の運営が厳しくなり、文具や小間物販売を経て現在まで橋本結納店として営業している。

南側の河本鉄工は1955年（昭和30）頃に産経新聞豊岡通信局に売却。その後、共同で陸屋根の屋上に瓦葺の切妻屋根を架け（図7-24）、雨漏り対策をした。

1977年（昭和52）に産経新聞豊岡通信局の移転に伴い橋本結納店が南側を購入し、翌1978年（昭和53）に工事で隔壁を撤去し一体利用を始めた。

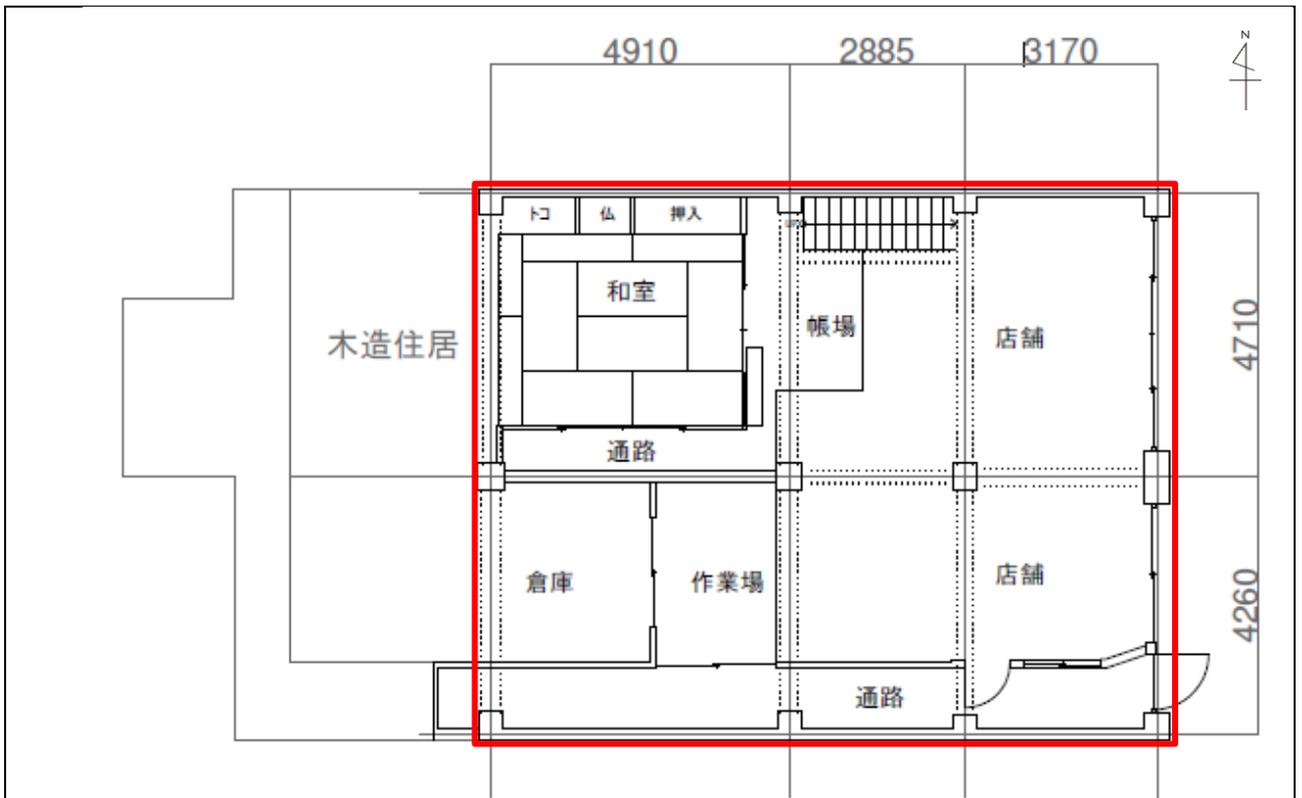


図 7-23 : 1 階平面図 (2025 年 1 月実測)

外観

1 階店舗部分は開放的な大開口としつつ、2 階部分は縦長窓がリズムカルに並ぶ立面構成である。当初の土地所有割合に応じて間口幅が異なっているが、開口部の幅を変えることで統一された立面デザインとなっている。2 階部分の 3 つ並んだ窓の間に立てられた間柱は断面形状がテーパースされており (図 7-25) 特徴的である。

建築当初と比べると、陸屋根の上に瓦葺き切妻屋根が架けられたほか、1 階のシャッターやオーニングの追加、2 階窓のアルミサッシへの変更などがあるものの、全体的な立面構成や外観は建築当初の面影を良く残していると言える。



図 7-24 : 切妻屋根の増築部分



図 7-25 : テーパーされた断面形状の間柱

(4) 服部本社（豊岡市小田井町 13-25）



図 7-15：正面（東立面）外観

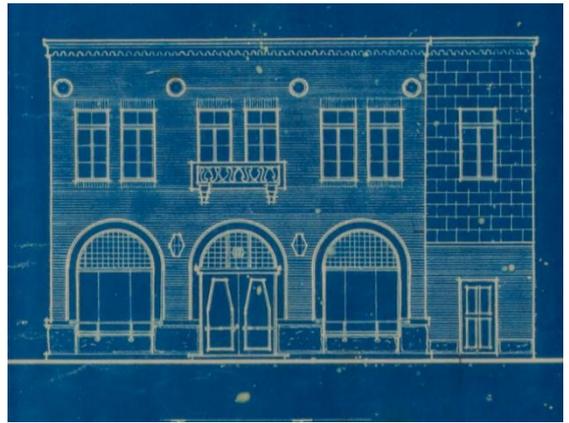


図 7-16：設計図書より東立面図。

構造 鉄筋コンクリート造 2階建て陸屋根
建築年 1927年（昭和2）10月
規模 間口約 13m、奥行約 29.1m

沿革

元町通りと加広通りの北西角に位置するRC造2階建ての本社棟と木造平屋建ての旧住居棟から構成される。

「服部」は1885年（明治18）に京都で創業し、豊岡製の柳行李を海外に販売する雑貨問屋。1911年（明治44）に豊岡に仕入部を設置、1913年（大正2）に豊岡支店を新築したが、北但大震災によって倒壊。1927年（昭和2）に再建*した社屋が現在も使われている。

戦災等により京都・大阪店舗を失い、1970年（昭和45）から本社を豊岡に移して鞆の製造販売を行っている。

※1927年（昭和2）5月付の設計図および見積図書、契約書一式が残る。工事請負は島藤大阪出張所（後の島藤建設→現・戸田建設）。

外観

壁面はタイルで仕上げられ腰下は石造で重厚に仕上げられている。軒下のコーニスや浮彫模様が施されたバルコニーが建設当時の姿を残している（図7-18）。

正面（東立面）の北端1スパン分は後に増築されており（図7-20）、この玄関やバルコニーは本来立面の中央に配置されていた。また、建築当初は正面1階の開口部はアーチ型であり、2階の開口も2連の縦長窓だったが、いずれもアルミサッシに変更され、タイルも張り替えられている。

時代の経過とともに増築や外壁改修等が行われ、再建時の外観的特徴はあまり残っていないが、震災からの再建建物の取り壊しが進み、その多くが失われた元町通りにおいて、服部本社は当時繁盛していた行李・鞆業の生業を今も感じられることのできる数少ない建物である。

現在も社屋として使用されているが、景観を意識してエアコンの室外機を外壁面に設けていない。



図 7-17 : 全体外観



図 7-18 : バルコニーやコーニスの詳細

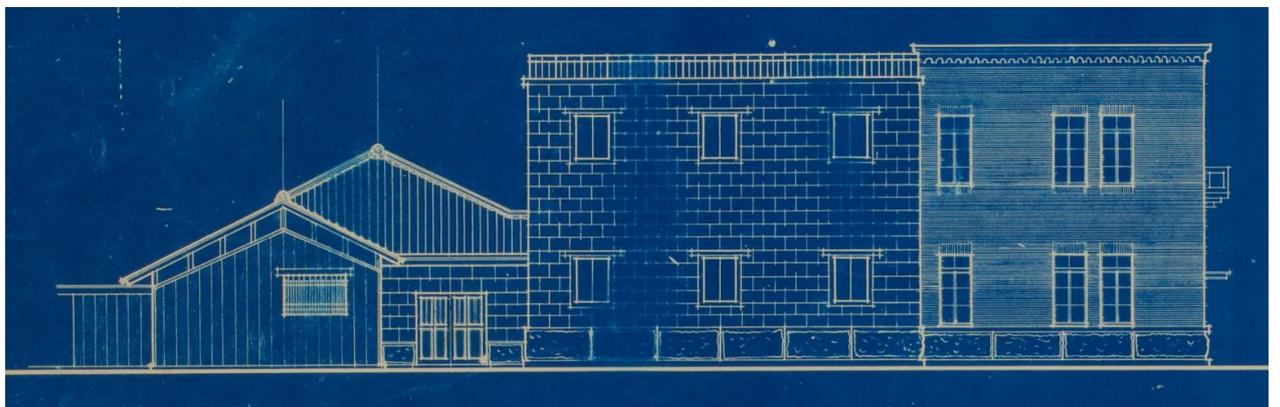


図 7-19 : 設計図書より南立面図。

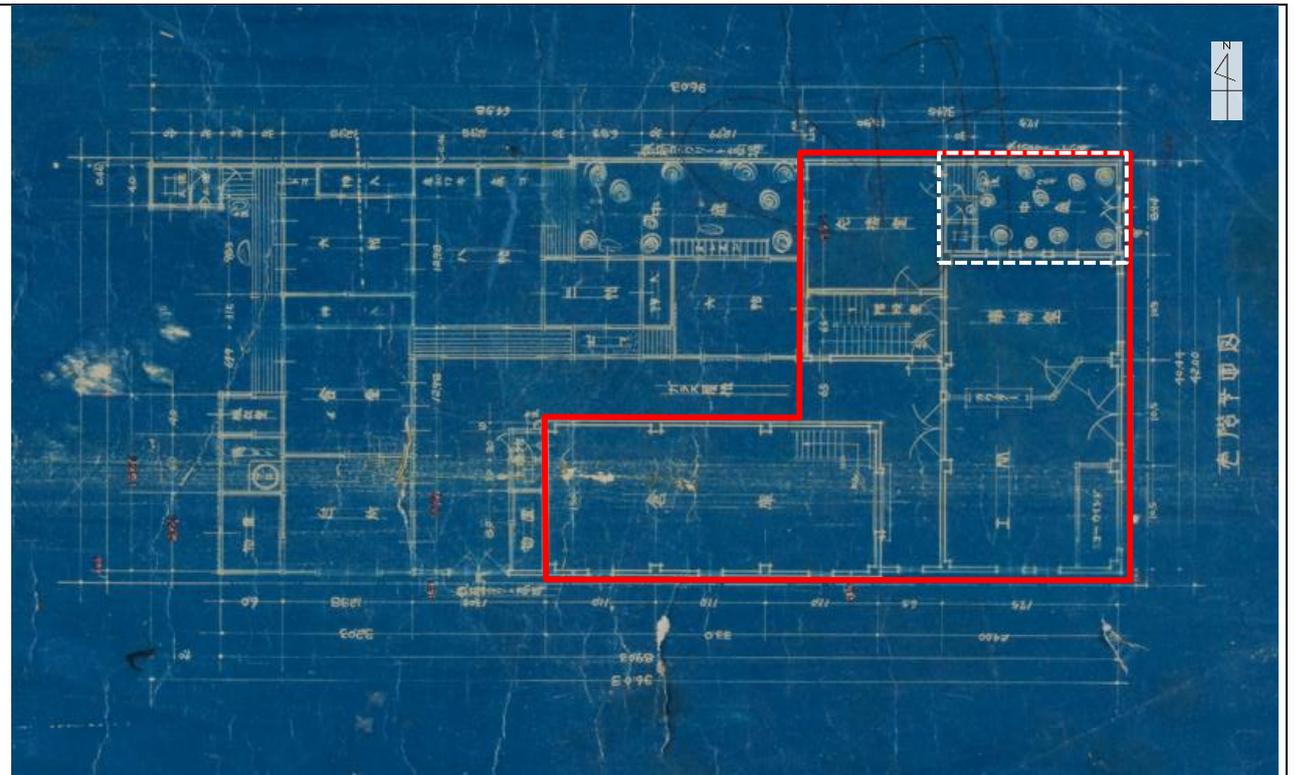


図 7-20 : 設計図書より 1 階平面図。当初北東にあった中庭は、後に増築され室内化している。

(5) つるや (豊岡市千代田町 8-23)



図 7-26 : 正面 (北立面) 外観



図 7-27:1970 年 (昭和 45) 頃の写真。
向かって右が つるや。

構造 RC造一部木造 3階建て瓦葺
建築年 昭和初期
規模 間口約 6 m、奥行約 16m

沿革

当初から所有者は変わっておらず、震災前は小田井町に居住。大開通りに移転するために、木造の店舗を建設していたが、被災し焼失したという。1928 年 (昭和 3) に県の補助金を用いて RC 造で再建。当初は 3 軒長屋として建設されており、東側にもう 2 軒分の間口が広がっていたという。

竣工当時は山陰電話建物株式会社、1936 年 (昭和 11) から山陰金融株式会社が営業。1952 年 (昭和 27) に つるや百貨店へ業種変更。昭和 30 年代に東側の 2 軒を売却し店舗を縮小している。なお長屋は 1 軒を残して解体済み。

1955 年 (昭和 30) から つるや株式会社、1995 年 (平成 7) から つるや有限会社として洋服・婦人服を販売している。当初は陸屋根 3 階建て。3 階 RC 部分の奥行は 1、2 階の半分程度であったが、百貨店開業時に増築し、総 3 階にしたうえで瓦屋根が架けられた。

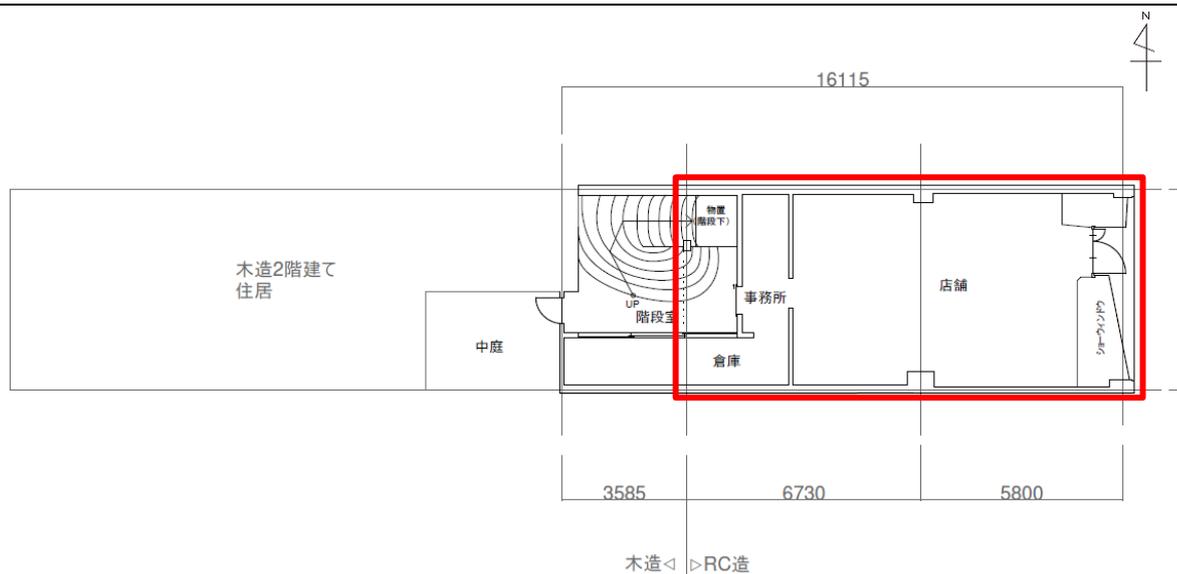


図 7-28 : 1 階平面図 (2024 年 11 月実測)

外観

1 階店舗部分は開放的な大開口としつつ、上層は縦長窓がリズムカルに並ぶ立面構成は、他の RC 造の復興建築と共通するものである。正面（北立面）や側面（西面）の壁に石積み風の目地を表現しているのが特徴で、2、3 階の窓上部も石積みアーチ風の装飾をしている。3 階中央の窓の上には羽ばたく鶴をモチーフとし、その下部に SK（山陰金融の頭文字）を付したメダリオンを配している（図 7-29）。



図 7-29 : 石積み風の目地とメダリオン



図 7-30 : 3 階増築部と瓦葺きの屋根

その他

所有者によると、竣工当初は玄関近くに階段があったといわれている。現在、内部には百貨店に業種変更した際に設置されたテラゾー仕上げの大階段やヴォールト天井が残っており、往年の百貨店の様子を彷彿とさせる。

8 維持保全・活用法の提案

(1) 維持保全・活用の方針

豊岡の震災復興遺産や復興建築（群）は、その殆どが100年近く経った今でも現役で活用されている住居や個人商店である。活用方針としては、今後も引き続きこれら復興遺産がまち並みやまちの営みの一部として所有者・利用者、地域の人々に親しまれながら活用され続けることが望ましい。

これらの物件はすべて築年数90年以上を経過しており、多くの所有者は現状の維持管理に課題を抱え、今後の運用に不安を感じていることが調査の中で確認された。

維持管理における共通した課題の一つに、雨漏りへの対策がある。震災復興期にRC造での建築を推奨した「防火建築補助規定」では、屋根がRC造の耐火構造であることが求められていたため、これらに該当する物件は陸屋根として建設された。また、当初からRC造と木造の混構造として建設されていた。経年による屋根の防水材料の劣化や構造接合部の隙間などが漏水の原因となっている。すでにいくつかの物件において、慢性的な雨漏りへの対策として建物をサイディングで覆うなどの改修工事が実施されており、建設当初の特徴的な外観を失ってしまった例が確認される。県の景観遺産としての維持を考えるうえで、外観上の特性を残す方針での改修工事を選択できるよう、所有者への助言に加えて金銭的な助成・補助制度の策定が求められている。

また、一般的には鉄筋コンクリートの物理的な寿命が100年程度と考えられている中で、所有者たちが建物の強度や耐震性に対する不安を抱えていることも分かった。個人の所有者においては、ひび割れの補修など長寿命化につながるメンテナンスが充分に行われていない現状がある。計画的な保全活動が必要となっており、強度試験や中性化状況の調査などの綿密な現況調査を行ったうえで、専門家による計画策定が必要となっていると考えられる。

豊岡の復興遺産を構成するRC造の復興建築（群）の価値の一つとして、昭和初期という時代における住宅規模のRC造という特異性が上げられる。また、これらの建物の多くが共同ビルとして長屋形式で建てられており、改修や維持管理の方針において所有者間の合意形成が難しい側面がある。歴史的な価値や維持管理の難しさを考慮すると、所有者個人での保全・活用には限界があり、官民学一体となった保全活動が必要な局面になっている。

景観遺産として登録することにより、認知度や理解度を高めつつ、次のステップである「ふるさと意識の醸成や地域の活性化」に繋がる取組みを行っていくことが必要である。

令和7年は震災100年の節目の年であり、市の記念事業等も計画されているため、これを契機にまちぐるみで地域活性化へと繋げていく取組みが求められる。

(2) 活用法の提案

豊岡市において復興建築（群）や復興遺産の価値や魅力は、地域住民や市民にも十分に理解されていない現状がある。景観遺産への登録を契機に理解が浸透し、保存活用に向けた気運が形成されることが、今後の活用において重要となってくる。

令和6年に8物件が景観遺産登録となり複数の新聞に記事が掲載されたことで、「復興遺産」や「復興建築（群）」が知られる契機となったが、これまでに登録された物件や今年度登録候補の物件は、その殆どが小規模な個人住宅や商店であり、単体での観光客の誘致や魅力発信には限度がある。これらは復興建築（群）としての面的なブランディングが必要であり、豊岡まち塾[※]などが開催する周遊型イベントなどの継続的な開催が考えられる。

豊岡の中心市街地には未だ景観遺産に登録されていない復興遺産や復興建築（群）が建ち並ぶ通りに調和するよう建築された洋風意匠の木造建築物が数多く残っており、出前講座等を通じた地元の学生と連携した活用提案、PRを行っていくことが「ふるさと意識の醸成や地域の活性化」に有効であると考えられる。

また、復興遺産が地域のまちづくりの原動力となり適正に活用されていくためには、前述のハード面での支援に加えて、高齢化が進む復興遺産所有者へのサポートや事業継承、空き家・空き店舗の仲介などのソフト面の体制構築が必要となる。

※豊岡中心市街地の町並み保全団体である「豊岡まち塾」は2015年の結成より、復興遺産に関する調査やヘリテージング活動、まち並みの魅力発信などを継続してきた。団体のメンバーは兵庫県ヘリテージマネージャーや建築士らの専門家に加え、地域の商店街関係者や市役所・商工会の職員、復興遺産の所有者らが参加している。建物を保存するだけでなく、シャッター街の目立つ豊岡中心市街地の活性化や課題解決を目的に活動している。